



## 歴史が生みだす紛争、紛争が生みだす歴史 ——現代アフリカにおける暴力と和解——

佐川 徹・竹沢 尚一郎・松本 尚之 編

横浜 春風社 2024年 290p.

本書は、アフリカ現代史における複数の紛争を取り上げた、人類学者と歴史学者による論文集である。その特徴は、紛争そのものの経緯を辿ることや原因を探ることよりも、紛争の当事者となった人びとと彼（女）らが所属する社会の歴史を丁寧に叙述することに焦点が当てられていることである。それにより、紛争に伴う暴力や紛争後の和解が、紛争当事者とその社会にとってどのような意味を持つのか明らかにされている。

編者3名による序章では、政治学者の文献も参照しつつ現代アフリカの紛争の特質が整理された後、当事者の一方が国家である紛争を人類学者が記述する際の留意点が示される。序章の後、本書は3部7章から構成される。第1部は旧宗主国の関与に着目した3論文からなり、それぞれ、マリ北部サヘル地域の紛争の歴史的背景とフランスによる介入の失敗（第1章）、英領ナタール植民地で用いられた間接統治の仕組みが南アフリカ連邦全体に展開された際の白人政治家の役割（第2章）、ウガンダ北部の人びとを「暴力的」とみなすステレオタイプがイギリスによる植民地支配期の軍隊への徴用や編成を通じて創り出された過程（第3章）が論じられる。紛争当事者となった人びとの「暴力のモラルティ」を扱う第2部では、南スーダンのヌエル社会（第4章）とウガンダ北部のアチョリ社会（第5章）について、殺人が起きた際の「報復」や「賠償」といった、それぞれの社会に由来からある暴力と和解に関する概念の解釈と実践が、紛争の形態や規模が変化するなかでいかに変遷してきたのか詳述される。第3部の主題は過去の紛争の記憶であり、ナイジェリアのビアフラ戦争に敗北したイボ人が現代の「さまよえるユダヤ人」の末裔として民族の受難の歴史を捉えようとする姿（第6章）と、ジェノサイド後のルワンダで被害者として政府に認められず苦しむ人びとや、認定されても被害者としての生き方を拒否する人びと（第7章）が描かれている。

どの章も紛争当事者ないし当事者の属する地域社会に寄り添いつつ、複合的な資料をもとに、国、地域社会、あるいは個人のレベルでの暴力と和解の歴史を丁寧に描いており、人名、地名、組織名などの固有名詞が多く登場する専門家向けの内容であるにもかかわらず、容易に読み進めることができる。アフリカの人びとが紛争の暴力をどのように経験し、そして紛争後にその歴史といかに折り合いをつけて生きていこうとしているのかについて、多くのことを学べる一冊として、ぜひお薦めしたい。

佐藤 千鶴子（さとう・ちづこ／アジア経済研究所）

